
閉ざされた校舎(ほぼ台詞のみ)

中居忠彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉ざされた校舎（ほぼ台詞のみ）

【Nコード】

N2348X

【作者名】

中居忠彦

【あらすじ】

いつの間にか学校にいる冬木宗治……

帰ろうとするも、校舎から出る事が叶わない

誰も居ない校舎

宗治はとにかく、校舎からの脱出を図るが………

実験作品 その1

第1話・閉ざされた校舎

冬木宗治「俺、何で土曜日に学校にいるんだろ」

冬「時間は……3時半か。何故学校にいるか理由は分からんが、まあ、いいや……帰ろ」

一階、昇降口

冬「よっ」

グツ、ガチャツ

冬「……閉まってる。土曜だからか？つっても、部活してる連中とかだつて……いない。」

冬（ちょっと妙だけど……、とりあえず今度は裏口回ってみるか）

一階裏口

ガチャガチャツ

冬「……裏口つて、土曜日も閉まってるもんか？来客だつてあるだろうに……」

一階職員室

冬「失礼しまーすっ」

.....

冬（職員室も誰も居ない.....いくらなんでも無えだろ、この展開）

三階資料室「失礼しまーすっ、火野さーん？」

.....

冬（いない、アテにはしてなかったが.....他誰か居ないか探してみつか。でなきや入り口閉まってるんじゃないっまで経っても帰れやしない.....）

.....

.....

.....

.....

.....

1時間後……………

冬「……………あれからあつちやこつちや歩き回ったが、人1人見当た
らねえ。どうなってんだ、一体……………母さんに帰り遅くなるってメ
ールでも入れ……………え？」

携帯時刻3時30分32秒

冬「俺が時間確認した時と時間が変わってない？コレは……………」

？「おーい、宗治ー！」

冬「っ！？」

夏希蒼麻「宗治っ、良かった……………お前もいたんだな……………」

冬「蒼麻っ、何でこんなとこいんだよ？」

夏「それは俺も聞きたいよ、何でお前が土曜に学校いるんだー、と
か、どうして俺土曜に学校いるんだーって」

冬「……………お前もいつ学校来たか解らないのか？」

夏「ああ、何でいるんだろって、さっきからずっと……………って、
宗治もかっ？」

冬「気付いたら学校にいた」

夏「俺も。んで帰ろうと思って昇降口行ったり裏口行ったりしたんだけど、鍵掛かってて出られなくてさ。職員室行って誰かに開けてもらおうとしたんだけど、誰もいない……だから、火野先生ならいるかな？って思って探してたら、お前見つけたんだ」

冬「そうか……俺とほとんど一緒か」

夏「宗治も？」

冬「俺は火野さん探したがいない……、で、取り敢えず1時間くらい本館の方手当たり次第探したが、ひの字も見当たらん……つてとここでお前に会った訳だ」

夏「そうだったんだ……」

冬「そうだ……、蒼麻携帯見せてくれねーか？」

夏「？」

第2話・食い違う時間

冬「そうだ……、蒼麻、携帯見せてくれねーか？」

夏「？」

冬「いいから」

夏「よく分かんないけど、はい。」

冬「サンキユ、4時02分……なるほどな、返す。後でもっかい見せてくれ。」

ヒュッ

夏「おっと。どうしたんだ、宗治も携帯持ってるよな？」

冬「ああ。ちっと気になった事があるよ。俺さ、3時30分から学校出ようとしたんだ。」

夏「……うん。」

冬「さっきも言った通り、1時間は歩き回った。で、さっきお前に会うちよいと前に携帯で時間確認した。」

夏「……それで？」

冬「……………見てみ。」

ヒュっ、パシっ

夏「……………え？」

3時30分32秒

夏「お前、本当に1時間……………？」

スッ……………

冬「ほとんど1時間だ。移動中時間確認しながら動いてた訳じゃないが、間違いない」

夏「……………」

冬「蒼麻。お前、学校にいるって気づいたの、何分くらい前だ？感覚でいい。」

夏「……………多分、30分くらい。」

冬「予想だが、お前の携帯も、時間が動いていないかもしれん。」

夏「っ!？」

冬「確証は無いが、調べられるな。蒼麻、取り敢えず2、3分くらいしてからもう一度携帯開くぞ。」

夏「……………分かった。」

3分後……………

冬「……………そろそろか、開くぞ。」

夏「うん……………」

3時30分32秒

4時02分

冬「……………決まりだな。」

夏「嘘だろ、何で……………」

冬「分からん、とにかく……………もう一つ調べたい事がある、そっちに行くぞ。」

夏「……………」

3階1 - D教室

冬「よし、着いた。」

ガラッ

夏「何で一年の教室なんか……………」

冬「目の前だったしな。さて……………」

チラッ

夏「何見てるんだ？」

冬「……………時計」

夏「何で？」

冬「……………何か解りそうで、更に解らなくなったな。」

夏「へっ？」

チラッ

夏「……………どうなってんだよ、コレ。」

6時47分50秒

冬「……………」

3時32分32秒

夏「……………」

4時02分

夏「……………」携帯が調子悪いのかな。」

冬「電波修正入るだろ、普通は。……………」百歩譲ってそうだとしてみても、一番大きな問題の答えにはなっていない。」

夏「……………」。

冬「俺達がいっここに来て、何でこんな、誰もいない学校に閉じ込

「められてるからだ。」

第3話・食い違つ時間2

冬「俺達がいつここに来て、何でこんな、誰もいない学校に閉じ込められてるかだ。」

二階2 D

冬「……………」

夏「……………」

冬（あれから俺達は、自分達の教室に戻った。そのまま一年の教室にいても構わなかったが、自分達の教室のが落ち着くからという理由からという事で戻る事にしたのだ。）

送信先 母

ピッ

送信エラー 送信できませんでした

送信先 父

ピッ

送信エラー 送信できませんでした

冬（……………結局、この異様な状況下で家に連絡入れんのすっかり忘れてたが、やっぱり外部に連絡すんのは無理か。期待してなかった分、そこまで俺には堪えないが……………。）

チラッ

夏「……………」

冬（蒼麻の奴は完全に参ってるな……………。つってもさすがにこの状況は俺にも……………。）

ピッ

3時30分33秒

冬（……………時計が1秒だけ進んでる？……………もう一度、家に連絡
入れてみるか。）

送信先 母

ピッ

送信エラー 送信できませんでした

冬（やっぱり無理か……………、なら。）

発信先 家

ピッ

……………

冬（呼び出し音1つならない……………。）

チラッ

夏「……………」

冬（そっいや、外部は無理だったが、内部はどうなんだ……………。試し

てみるか)

発信先 夏希蒼麻

ピッ

……………プップップ

冬(繋がったっ。さあ、どうなるっ?)

ピリリリリリリリリッ!

夏「うわっ!?!」

ピリリリリ、ピッ

夏「はい!もしもし!?!」

冬『内部なら繋がるみたいだな。』

夏「って、宗治!?!つまらない冗談やめろよ!」

冬『そんななどんよりオーラ延々と横で吐き出されてたらこっちも鬱
になるわ。』

夏「うぐっ。」

冬『んな事より、一旦切るから、今度そっちからかけ直してくんね
ーか?』

夏「はっ？何でっ？」

冬『いいから。』

ピッ

.....

ピッピッピッピッピッピッ

夏『一体何したいんだよ.....。』

冬「分かった、サンキューだ蒼麻。」

ピッ

冬（やっぱり、外部は無理だが内部はいける。つー事は、アレ試す
価値ありだな。）

第4話・食い違つ時間3

冬「やっぱり、外部は無理だが内部はいける。つー事は、アレ試す
価値ありだな。」

夏「一体、何なんだよ。」

冬「……………ある仮説と、試したい事がある。」

夏「どんな？」

冬「正直なところ、根拠の無い話になるが、それでも聞くのか？」

夏「ああ、こんな変な状況なんだから、ぶつ飛んだ話になつても、
驚いたりはしない……………たぶん。」

冬「……………恐らく、ここは俺達がいつも来てる学校じゃない。」

夏「……………は？」

冬「どういつ仕掛けかは知らない。ただ、いつも来てる学校ではな
いと思つて。」

夏「……………」。

冬「俺達さ、携帯の時計が違う時間指してるだろ？学校の時計も、俺達の時計のどれとも合わない。ここに来ただろう時間を考えて計算しても、だ。」

夏「……………確かに。」

冬「たぶん、俺達は何かに、ここに連れてこられた。それも、バラバラの時間から。」

夏「バラバラの時間？」

冬「ああ。これも何故かは知らないが、俺達がここに来ただろう時間は、同じではない。俺からしたら今のお前は、ほんの少し未来のお前だし、お前からしたら、俺は少し過去の俺になる。」

夏「何で……………？」

冬「だから、それはわかんねえよ。敢えてそうしたのか、或いは、何らかの事が原因で、同じ時間に俺達をここに放り込めなかったのかもしれないし……………」

夏「……………。」

冬「それと、あくまで仮説の上での話だが、こっちではもう2時間近く時間食ってるが、恐らく、俺達が本来いる場所での時間は1、2秒くらいしか経ってないはずだ。」

夏「どういう事なんだ？」

冬「……………これ、携帯の時間見てみ。」

夏「変わってないんじゃない？……………っ。」

3時30分33秒

冬「変わってんだ、1秒だけ。」

夏「でも、たったの1秒だろ？何かの拍子に。」

冬「そうかもしれない。言ったら、仮説なんだ。根拠なんてまるで無い。でも、有り得るとも思ってるんだ。こんな状況なんだから。信じなくても、いや、聞き流しても構わない。」

夏「……………。」

冬「自分で言っても信じらんないんだ。何ファンタジー語ってるんだ、って思ってるんだ。でも、そう考えたくなるくらい、異常な状況なんだから、そう考えても有りかな、ってな。」

夏「……………少し、時間をくれ。」

冬「構わない。もう少し調べたら、何か出るかもしれないんだ。こんな根拠の無い仮説よりも他に信用できる情報が入るかもしれないんだからな。」

夏「……………」

冬「で、だ。1つ、試したい事がある。それは……………」

第5話・夏希蒼麻

夏「……………」。

夏（恐らくここは、俺達がいつも来ている学校じゃない、か……………
…。）

冬「ん、どうした、蒼麻？」

夏「ああ、ごめん。何でもないよ。」

冬「そうか。」

夏（少し時間をくれ、と言ってしまったけど、何となく宗治の言っ
てるので殆ど間違いない様にも思えてくる。）

夏（だって、状況からして怪しいじゃないか。この学校の時計の時
刻はもう7時回ってるのに、何で外はこんなにも明るいんだ？）

夏（加えて、携帯……………外部には繋がらない、時間がほぼ動いてな
いって事以外じゃ、携帯は普通に動いてる。）

夏「……………」。

夏（どうして、校舎内部だけには通じるんだろう……。それに、何でいきなり宗治の携帯の時計は1秒だけでも動いたんだろう……。）

夏（やっぱり、ここは俺達がいつも来ている学校ではないんだろうか、じゃあ、ここは何処なんだ……。いいや、それ以前に……。）

夏（誰が、もしくは何が一体何の目的で、俺達をこんな所に閉じ込めたんだろうか……。）

第6話・新たな仲間

冬「で、だ。1つ、試したい事がある。それは……………」

冬「……………高遠先輩も椿先輩も駄目、か。里桜も出ない、紅師も……………」

夏「須藤、駄目。芦屋、駄目。……………柳に櫛那もか。」

冬（内部にいる奴には通じるってのは分かったから、電話をかけて繋がる奴と集まってみるって作戦を思い付いたはいいが……………やはり簡単にはいかねえか……………。）

冬「ん、どうした、蒼麻？」

夏「ああ、ごめん。何でもないよ。」

冬「そうか。」

冬（蒼麻は蒼麻で、現状整理をなんとかしてるって顔か。まあ、わかんない事だらけだし、とにかく使える手は全て使うか……………。）

.....
.....
.....
.....
.....
.....

冬（もう大分、アドレス帳ん中風漬しにかけまくったから、流石に
もう少なくなってきたな.....、残るは.....部活メンバーか。）

上山 浩平

ピッ.....

ピッピッピッピッピッピッ

冬「.....繋がったっ。」

夏「誰に!？」

冬「上山だ。出てくれよ……………っ。」

ピッピッピッ……………

上山浩平「もしもし。」

冬「よう、冬木だ。」

上「冬木、マジでか!？」

冬「ああ、マジだ。今何処にいる。」

上「あ、ああ……………何かよく解んないんだけどよ、いつの間にか学校にいて……………。とりあえず、今は職員室にいるんだ。」
冬「分かった、今からそっち行くから待ってる、今教室だから、すぐ着く。」

上「分かった、すぐ来てくれよ。気味悪くて恐えーよ……………。」

冬「赤い絵の具被って血まみれ装って行ってやるな。」

上「馬鹿な工作しないではよ来いよ!？」

冬「わーった、わーった。じゃな。」

ピッ

冬「今、職員室にいるらしいから、行くぞ蒼麻。他の連中への電話は後でいい。」

夏「なあ、浩平の奴ももしかして……………」

冬「状況俺達とおんなじでまるで分かってないみたいだったしな。たぶん俺達と同じ状況だ。」

夏「じゃあ、今は仲間が増えたの喜ぶべきかな。」

冬「ああ、そつだな。」

第7話・新たな仲間2

夏「じゃあ、今は仲間が増えたの喜ぶべきかな。」

冬「そういつだった。」

一階職員室

冬「上山。」

上「冬木！それに夏希もいんじゃない？」

夏「ああ。俺達は随分前に合流出来てさ、ずっと一緒だった。」

上「何にせよ、これでちょっと気が楽になるよな？」

冬「ああ。ヤバい状況になったら上山身代わりにして逃げられるし

な。」

上「お前に俺、何なんだい？」

冬「保険。」

上「てめえっ！！」

冬「冗談だ。それより、お前、どこから来た？」

上「え？ああ……………何かいつの間にか別館の二階の体育館への渡り廊下にいてさ。帰ろーと思って一階の昇降口行ったら閉まって、それで……………」

冬「色々やってたら職員室まで来て、そこで俺達から連絡来たと。」

上「そうなんだよ。携帯も通じないし、携帯の時間は変な時間になってるし。」

冬「ちよい携帯見せてみ。」

上「ほい。」

冬「……………」

1時02分26秒

夏「俺達より時間早いね。」

冬「ああ、つー事はだ。あまりこの時間にこだわる必要ないだろ。」

夏「あんまり意味ないみたいだね。」

上「……………さっきから、何の話してるのかな。」

冬「一応聞いとくか……………。上山、学校にいるって気づいたの、今からどんくらい前だ。正確じゃなくていい。」

上「あ？あ……………20分くらい前じゃないかな。」

冬「なるほど、時間にこだわっても意味がないのは間違いない。こ
うもバラバラならな。」

上「あの一……………、そろそろ何の話か教えてくれても……………」
冬「ん？ああ、すまない。実は……………」

上「……………マジでか。」

冬「今のところ、これといった確証は無いんだがな。だが、この異
様な状況を考えると、そういう事でも可笑しくないと、俺は思う。」

上「……………。」

冬「蒼麻にも言ったが、聞き流してもいい。恐らく、違っただろうか
ら……………」

？「いや、冬木。お前の言った事が、現状出しうる答えで最も真
相に近いだろう。」

第8話・新たな仲間3

? 「いいや、冬木。お前の言った事が、現状出しうる答えで最も真相に近いだろう。」

冬「オッサン!？」

火野秋嗣「教師をオッサン扱いか……………まあ、いいや。」

夏「先生も来てたんですか？」

火「夏希、お前は良い子だな。まあ、俺もいつの間にか……………お前らの言う、居る事に気付いたっていう時間と言うと……………大体4、5時間前かな。」

上「オッサン今まで何やってたんだよ……………。」

火「上山、お前は今期の成績全て1ずつ評価下げとくな。」

上「何で俺だけ!？」

冬「つか、火野さんマジで何やってたんだ？」

火「ああ、実はな……………。俺はお前らと違って、ここに来る前の記

憶がある。そのせいで、動くのが遅れちまったのもある。」

夏「来る前の事、覚えてるんですか……………」。

火「俺な、昨日夜はずっと別館の資料室で棚の整理とか全部やってたんだが、途中で眠くなつてやめたんだ。どうせ明日土曜日だし、つて思つてそのまま資料室で寝て……………気づいたらこの学校にいた。」

冬「なるほど。つまり、日付間違いで学校にいたから、それで気付くの遅かった訳か……………」。

火「そういう事。しかも、そこから資料整理再開したから、尚更ね。だけど、途中で嫌に静かなのに気付いて、お前らと同じで色々探つた……………。で、今に至つたと。」

冬「ふむ……………。火野さん、何でここがいつもの学校じゃないって気付いたんだ。さっきの俺の考え、普通に肯定してたし。」

火「ああ、それね……………」。

チラッ

火「この時間に、ここまで明るいののは可笑しいだろ。もう8時すぎ。最初に見た時計が怪しいのかと思つて教室片っ端から探つたが、ずれてる訳でもない。ここはいつも来ている学校では無いんじゃないか、と思ひ始めたつて訳。」

冬「火野さんはここ、何だと思つて?」

火「俺達がいつも行っている方の学校の事を記録した日記か何か…

……と、考えられもするな。」

夏「日記か……」

上「……何か？」

火「例えば、ここはかなり細かく書かれた、尚且つ開きっぱなしの日記のページの中の世界。時刻は昼間だ。日記の中で時間がいくらか進むと、いや、まあ日記の中で本当に時間が進むのかは知らんが、まあ、進むとする。だが、そのページは昼間の火が照ってる時間帯にどっかに置かれてるから、結局いつまでも日が出てる訳だ。」

火「まあ、信用するしないは自由だが。」

第9話・新たな仲間4

火「まあ、信用するしないは自由だが。」

冬「状況が状況だ。信じるよ。まあ、もっとも……………」。

火「その予測は仮に当たっていても意味がない、と？」

冬「……………さすが火野さん、鋭いな。」

火「そうになると、冬木。自分の言った事も意味がないって話になるのかな。」

冬「そうだな、意味がない。」

上「ちよつと待てよ。ここまで色々分かったのに、なんで意味が無いんだよ。」

夏「ここがどういうカラクリで動いてるか分かっただけで、肝心の問題が一個も解決してないから、か？」

冬「ん。」

上「は？」

火「俺達の目的は、ここが何なのか？じゃなくて、どうやってここから出るか、だろ？」

上「あー……………」

冬「俺達がこの仕組みを推理したのは、ここから出る方法のヒントか何かが見つかるかもしれない、と思ったからだ。だが、今分かった事じゃ、何の役にも立たない。」

夏「……………振り出しに戻った？」

上「マジかよ……………」

火「いや、そうでもない。」

夏&上「？」

冬「結局、今までの推測は無駄になったが、閉じ込められた仲間を見つける事が出来た。」

火「4人もいるんだ。落ち着いて動けば、何かしら脱出する方法が浮かぶかもしれんぞ。」

夏「……………」

冬「それに、他に誰がいるなら、合流しないとな。」

チャラッ

上「携帯……………そうかつ。」

夏「確かに、戦力は多い方がいいね。」

冬「そういう事だ。さあ、探そうぜ。」

冬「他にいるかもしれない仲間をな。」

第10話・火野秋嗣

火「ふむ……………」

火（冬木達と合流出来たはいいが、どうするかね。）

火（もしここが、本か何かの世界だと仮定した場合、俺らを閉じ込めてる本を探しても意味がない……………。）

火（冬木もやっぱまだガキだな。そんな簡単に決めてかかるあたりは。）

火（取り敢えず、どつかしらで……………、あるかどうかは分からないが、外の世界で俺達をここに閉じ込めたであろう品を探すとするか……………。）

火（調べる価値は充分ある……………。ただ、問題はそれを見つけたはいが、オマケで何かくつついていた時……………。）

火（ただの物言わぬ物が、何故俺達を閉じ込めたのか……………、恐らくは……………）

火（俺達を閉じ込めた品の持ち主が、大きく絡んでいるのだろう。
そして、ここにいる俺達は、何らかの形で、それに関わってしまった……。）

火（だが、そいつは何時だ。俺達は、何に触れちゃったんだ……
……。）

第11話・狂気

冬「そういう事だ。さあ、探そうぜ。」

冬「他にいるかもしれない仲間をな。」

ピピピピピピピピ

冬「うおっ！？」

夏「！？」

火「……………冬木の携帯か。だが……………」

ピピピピピピピ

上「外からは繋がらないんじゃない……………」

冬「ああ……。それに、相手は……。」

秋山蓮

火「蓮ちゃんじゃないか。」

夏「なあ、繋がったって事は……。」

冬「マジかよ、中にいんのか……。」

ピピピピッ

冬「もしも……。」

秋『おっそおおー！っ！っ！っ！』

冬「……ぐっ。」

夏「……宗治？」

冬「……耳がいてえ……。」

スッ

冬「いきなり叫ぶな、馬鹿女あつっ！！！！！！！！」

秋「何ですつてえっ……………つて、そうじゃなかった……………。あんな今何処にいんの？他に誰か近くにいます？」

冬「え？あ、ああ……………今たぶん学校だ。近くに蒼麻と上山、火野さんがいる。」

秋「たぶん学校って……………まさかあなた達も誰もいない変な学校に閉じ込められてんの？！」

冬「もつて……………やっぱり先輩もかよ。」

秋「やっぱりってどういう……………ううん、後で聞くとして……………学校の何処？」

冬「職員室だ。」

秋「職員室……………、ぎりぎり撒けるかも……………すぐ行くから待って！」

プツッ

冬「っ。」

火「切れたのか。」

冬「ああ。すぐ行くから待ってる、って。それとぎりぎり撒けるかも……………とか何か言ってたが……………」

夏「……………撒く？」

冬「何か言ってたんだが……………何を撒くんだ？」

上「秋山先輩の事だから、めんどい話な気がする……………」

冬「……………。」

冬（蓮先輩は明らかに慌てていた……………。撒くって言うてるあたり、何かから逃げている訳だが……………。何から逃げている？）

冬（明らかに悪い予感しかしないんだが……………。）

第12話・狂気2

冬（蓮先輩は明らかに慌てていた……。撒くって言ってるあたり、何かから逃げている訳だが……。何から逃げている？）

冬（明らかに悪い予感しかしないんだが……。）

10分後

上「……………嫌に遅くね？」

夏「別館からなら歩いてでも、職員室は10分もかからないはずだけど……………」

火「冬木、蓮ちゃんは撒いてるって言っただったな。」

冬「……………探してくる。」

たっ たっ たっ たっ たっ ……

火「待て、来たみたいだ。」

ガラッ

秋「はー、はー……………。やっと逃げられた…。」

冬「蓮先輩、よく分かんねえから、説明をしてほしんだが…。」

秋「はっ、はっ……………ちょっと……………待ってて。」

冬「……………。」

冬（蓮先輩がここまで息切れしながら逃げるって、一体何があったんだ……………。）

秋「……………はー。うん、OKOK。じゃあまずは……………。」

冬（蓮先輩も俺達と同じく、気付いたらこの学校の、俺達の部活動でもある演劇部の部室にいたらしい。学校から出ようとしたが、出られず……………というのは、俺達と一緒にのだが……………）

秋「見た事ない制服の女の子がいて、話を聞こうとしたんだけど、明らかに眼がいつちゃってて、いきなり狂ったみたいに笑い出したから、逃げてたんだけど……………」

冬「追いかけられたと。」

秋「そう、撒くのに必死だったわよ。」

上「なあ、それってさ……………」

火「……………」

上「俺達、相当ヤバイ状況じゃないの？」

第13話・狂気3

上「俺達、相当ヤバイ状況じゃないの？」

全「……………」。

冬「確かに、その話が本当なら、俺達はそいつにつかまったら相当やばいって話になる。だが……………」。

夏「……………」でもさ、って事はもしかしたら、そいつがこの状況の元凶なんじゃ……………」。

冬「蒼麻……………」。

火「まあ、可能性としては有り得るわな。なんか、その女子生徒も聞いている限りじゃ、まともじゃないのは確かだし。」

上「じゃあさ、そいつをどうにかしちやえばっ……………」

冬「どっせってっ。」

上「どっせって……………」そりゃそいつ捕まえてさ。」

秋「無理だと思つわよ。本当に普通の感じじゃなかったし……………」。
近づきたくても恐くて出来たもんじゃないわ。」

冬「先輩が言つてるのは相当だぞ、上山。俺達がどうこう出来る問題じゃない。」

上「……………そうだね。」

秋「と・う・ぎ？どついう意味かしら？」

冬「突つかかつてきた不良10人数秒で全滅させる人間が言つんだから間違いない。」

秋「何でそんなこと知つてんのよ!？」

冬「こないだ見た。」

夏「そ、そんな事してたんだ……………」。

秋「こ、こほん。ま、まあとにかく、そついう考えは無駄って事よ。」

火「お前は何いらん伝説を作ってるんだ……………」。

秋「あう……………」。

冬「冗談抜きに、先輩が逃げ出す様な奴が相手じゃ、ここにいる人間じゃ……………」

火「……………」

冬「火野さんぐらいだろうが、正体不明な生き物であろうと幽霊だろうと何だろうと、女が相手じゃ手なんか上げやしない……………。実質、見たら逃げるしかないな。」

上「待てよ？先輩追ってきたのを撒いたんだよ……………」
秋「まあ、確かに撒いたっちゃ撒いたわよ。簡単に見つかったらやばいから、三階あたりでうまく……………」

……………カッ

冬「……………？今、何か……………」

夏「……………先輩、それって本館の？」

秋「別館まで逃げようなんて、考える余裕なんて有るわけないでしょ？何とか撒いて合流しなきゃってのをギリギリ考えられるくら

いだったんだから。」

……カツカツカツ

冬（……やはり、何か近づいて来てる。まさか……）

冬「みんな……」

火「全員、今すぐ伏せろっ。」

秋「まさか……」

夏「こっちに来たって……」

上「え、何？」

火「いいから伏せろっ。」

全「っ!？」

ガバツ

冬（火野さんも気付いてたか……。それも、普段めったに声荒げないのにここで声を荒げるとなると、相当警戒してるな……………）。

カッカッカッカッカッ……

夏「足音が聞こえる……………」

秋「……………近い。」

上「嘘だろ……………」

冬&火「……………っ。」

カッカッカッカ……………

ガラッ

上「……………っ。」

火「全員、音を立てるな、声も出さなよ……………」

スッ……………

冬「……………」。

火「冬木、何やってんだっ。」

冬「ここからなら、鏡で職員室の入り口が見える。見つからない様に様子を見るから、少し静かにしてしてくれ。」

火「……………」。

冬（職員室の入り口からいくらか離れてるが、近付かれてきたら逃げるしかない。無駄にここの職員室は広いんだ。逃げる時間は十分稼げる……………。）

トヨコッ

冬（……………。「じゃ、マジで普通の女じゃないな……………」。）

第14話・狂気4

冬（……………「りゃ、マジで普通の女じゃないな……………」。）

女「……………」

冬（充血したみたいに目が真っ赤に光ってる……………。）

冬（雰囲気からして近寄りたくても近寄れない感じだし……………蓮先輩が逃げる訳だ。）

スッ

夏「……………どうだった？……………」

冬「……やばいな、一部除いて見た目は普通の人間なんだろうが、あらい目散に逃げるわ。……」

秋「……でしょ?……」

火「……冬木、場所変われ、覗いてみる。……」

冬「……ああ。……」

火「…………。」

火「……本当にやばいな。……」

冬「……位置は?……」

火「……恐らくお前が見た時のまま、扉の前だ。……」

冬「……一気に奴のいない扉から逃げるか?……」

上「……待てよ冬木っ、お前それはっ……」

火「……早まるな、いくらなんでも危険だ。捕まったらアウトは間違いないが、そいつは最後の手段だ。こっちに気付いたら逃げる。向こうが去るかもしれん、待とう。……」

夏「……宗治、焦る気持ちは解るけど、今は……」

冬「……解ってる、悪かった。……」

秋「……先生、そのまま見張りお願い。……」

火「……了解だ。……」

30分後……

火「……まだ動かない。……」

冬「……こっちにいるの気付いてるのか？……」

秋「……でも、そしたら何でこっちに来ないのよ？……」

冬「……敢えてこっちが出てくるのを待ってるのか？……」

火「……状況は動かないか……。みんな、走れる準備だけでもしろ。
……」

冬「……強行突破か？……」

夏「…………。」

火「……お前らが逃げられるくらいの時間は稼ぐ、俺の心配はするな。考えがある。……」

冬「……分かった。……」

上「……冬木つ。……」

冬「……火野さんに嘘つかれた事はない。この人が本当に危険だと感じたら、動かないさ。……」

火「……そう言う事だ。カウントしたら走れ、いくぞ。……」

火「……5……」

上「……。」「

火「……4……」

夏「でも、今の非常ベルだよな？」

上「まさか……………？」

秋「私達以外にも、誰かいるのかな？」

冬「……………たぶんな。ただ、非常ベルなんて、誰か押さなきゃ鳴らないんだ。いるんだろうよ。」

火「問題は、それがこっち側か向こう側なのか、ってところね……………。」

上「？」

火「あんなのが出てきたんだ。もう1人いてもおかしくないでしょう。つての。」

秋「あんまり考えたくないわね……………。」

冬「とにかく、今の内に出よう。また戻ってこられたら目もあてらんねえ。」

夏「そうになると、アイツが行ったルートとは反対側に行かないと駄目か……………って事は。」

火「たぶん…今、非常ベルが鳴ってるのは、美術室方面のだと思うぞ、音のデカさからして。」

冬「そうになると……………この際別館に抜けるか。部室なら、あそこは準備室もあるから、逃げられるし……………。」

秋「最悪、アレもある？」

冬「使いたくないが、可能性に入れるしかないな。」

上「なあ、戻ってくる前にさっさと移動しね？」

冬「そうだな……………ここはコイツのヘタレ思考を尊重し……………」

上「誰がヘタレだ!？」

別館 一階 演劇部部室

冬「ふう……………」

火「結局、非常ベル鳴らした奴には会わないまま、と……………」

冬「誰が鳴らしたんだ…………？」

夏「逃げる時間稼げたのは確かに助かったけど……………」

全「……………」

冬「取り敢えず、こっから先どうするか考えるか。まだ何も解決してねーし……………」

夏「むしろ、悪化してる気がする……………」

第16話・夏希蒼麻2

夏（もっ、どうしようも無いくらいに事態は最悪だと思う……………。

夏（この学校の仕掛けは、まだ仮説でしか解らないままで、何で閉じ込められているかも解らない……………。）

夏（しかも、それが何一つ解決していないだけじゃなく、俺と宗治以外にも三人もいる……………。）

夏（加えて……………職員室で見た……………、アイツは何なんだろう。）

夏（そういえば、俺達の他にも誰かいるっぽいし……………）

夏（誰なんだろう、一体……………）

火「……………っていうか今思ったんだが、ここにいるのって、みんな演劇部部長だな。」

夏（っ！？）

冬「……………ああ、偶然にしちゃ出来過ぎだな。」

夏（言われてみればそうだ。ここに居るのは、みんな部活メンバーじゃないか。火野さんだって顧問だし……………）

夏（もしかすると、もう1人いるかもしれない奴も……………）

夏（だとすると、ここにいない面子は2人だけだけ……………）

夏（もし、あの人なら、早めに探さないとまずいかもしれない。あの人もあの人で、ほっとくと面倒な事になりかねないし……………。あ……………）

第17話・偽りの終焉

夏「むしろ、悪化してる気がする……………」。

冬「確かに、正直あんなのが出るとは思わなかった。」

火「長居は出来なくなったわな、確実に。」

夏「うん……………」。

上「……………」。

秋「……………」。

冬「取り敢えず、みんな各々で休んどこうぜ。色々考えたい奴もいるだろうし……………」。

秋「ごめん、そうさせてもらっわ……………」。

上「俺もちょっと……………」。

冬「蒼麻、お前も休め。顔色悪いから。」

夏「うん……。」

火「みんな、やっぱり相当疲れてるな……。」

冬「……。」

冬（もう、この異様な状況にみんな流石に疲れてきたみたいだな。無理もねえが……。）

火「少し、状況整理といくか……。」

冬「……ああ。」

火「俺達は、いつの間にかいつも来ている学校によく似た学校にいる、脱出方法は現段階では無し。」

火「時間もよく解らない、外は一体どうなっているのか、それも解らない。」

火「挙げ句の果てには謎の女子高生、捕まったら相当ヤバそうな雰囲気。」

冬「あれはないな……。」

火「もう、悩みのタネだらけで、頭痛いわ、マジ。」

冬「アンタのその様を見てると、そうは思えないよ。」

火「表に出さない様にしてるだけよ、仮にも担任で、いざという時にお前ら守らないといけないのに、不安丸出しなんてする訳ないだろっての。」

冬「まあ、な……………」

火「つと、話が逸れた。そういや、あの時の非常ベル鳴らしたの、出てこないな。」

冬「ああ、あれなきや本当にヤバかったんだ、見つけたら礼ぐらい言わないとな。」

火「ぶつちやけ、そいつが味方で、お前らみたいに……………」

冬「どうした？」

火「……………つていうか今思ったんだが、ここにいるのって、みんな演劇部部員だな。」

冬「……………ああ、偶然にしちゃ出来過ぎだな。」

火「もしかすると、非常ベル鳴らしたのも、演劇部部員かもよ。」

冬「そうかもな。ただ……………」

火「ん？」

冬「何で演劇部の奴だけここに閉じ込められてんだ」

火「……………言われてみりゃそうだ、何かこんな目に合うような事
したっけな……………」

冬「……………」

（したか？こんな事になるような事を……………備品なんか壊した覚え
もないし、怪しい場所に行ったりもしてない。）

冬「火野さん、心当たりは……………」

火「……………ある。」

冬「マジかっ!？」

火「恐らくそれだろうという憶測だが……………」

冬「何でもいいっ。」

火「……………日記帳だ。」

第18話・偽りの終焉2

火「……………日記帳だ。」

冬「日記?」

火「お前、昨日部室掃除したの覚えてるよな?」

冬「ああ、授業終わってからやったが……………日記なんて……………」

火「部室にある使わない台本と資料、整理してたろ。」

冬「……………あの中につ!?!」

火「整理してる時、何らかの形で全員触れるなり中読むなりしたんじゃないか?」

冬（そういえば、一度、上山の馬鹿がいらぬ台本とかを無駄に高く積み過ぎて、それが倒壊した……………。めんどくさいから適当にかき集めたが……………）

火「妙にボロボロの古臭いノートだ。」

冬「……………覚えがない。」

夏「……………そのノートなら、俺も宗治も見てるよ。」

冬「蒼麻……………」

夏「ありがとう、もう大丈夫だよ。」

火「……………それで夏希、そのノートってのは灰色の表紙の……………？」

夏「はい。倒壊した山を、宗治が片付ける時に、宗治が投げたのを拾ったのを少し読んだんで、たぶんそれだと思います。」

火「冬木、お前中身は？」

冬「さつさと片付けたいからと思って片っ端から投げ飛ばしたいから、見てないな。それらしいもんも、他の本も。」

火「まあ、片づけに集中してたつつう事だから文句も言えないな。

……………ふむ、中身見てなくても、関係ない様だな……………」

冬「その日記が今回のに關係してる可能性は？」

火「内容は見てる。高い確率でそれだ。その前に、蓮ちゃん達に確

認取るか……………」。

夏「そうですね……………」。

冬「手がかりそれしか無いしな。」

秋「……………古い灰色のノート？」

火「正確には日記帳だな。」

上「あ……………なんか見た様な、つか中身見たかも。」

秋「あたしは中身見てないけど、たぶんそれは触ったかも……………」。

冬「たぶん全員触るか中身見るかはしてるって訳か。」

夏「そうなるね。」

冬「なあ、その中身ってのはどんな内容なんだ？」

夏「ああ、俺も全部見た訳じゃないから、詳しくは説明出来ないかな……。」

火「なら、そいつは俺が説明しよう。中身は全部読んでもからな。」

冬「助かるわ。」

火「簡単に掻い摘んで説明するか。いいか、あの日記の中身は……
……。」

第19話・偽りの終焉3

火「簡単に掻い摘んで説明するか。いいか、あの日記の中身は……
……」

冬（その内容は、俺達が驚く物だった。）

冬（日記の持ち主は、30年以上も前のこの学校の女子生徒で、旧校舎の火災に巻き込まれ、死んだらしい。その生徒はいつも1人だった。仲間を作る事が苦手だった彼女は、努力をするもそれが叶う事はなく1人でいざるを得なかった。）

冬（そんな中、彼女はある日、当時存在した園芸部に入部した。だが、そこで彼女は、ある男子生徒と出会った。その男子生徒だけは、彼女と友達になりたい……そう言って、彼女の初めての仲間
は出来た。）

冬（彼女は何よりもそれを喜び、そして自分からも、もつと他の誰かと向き合い、居場所を増やそうとした、その矢先だった。）

冬（火災事故が発生し、彼女は逃げ遅れ、そのまま命を落とした。）

火「……………この子は、いつも日記に持ち歩いていただわな。ここまで記録してあるんだから……………。」

上「なあ、火野先生。なんでその日記だけ残ったのかな？学校全体の火事なら、そんなノートなんて……………」

火「たしかに、普通なら燃えるだろうな。わからんな……………何故、日記だけは無事に残っていたのか」

秋「他の誰かが持ってたのかな……………じゃなきゃ、日記だけ外に放り出したのか……………」

冬「前者はともかく、後者は何でそうしたのか……………、助けのサインでも書いて外に出したのか……………」

上「それなら、外に向かって叫ぶなり、最悪飛び降りるなりしない？」

冬「それもそうだ……。そういや火野さん、いつ日記の中身なんて呼んだんだ？」

火「資料室だよ。台本のダンボールの中に一緒に入ってたのを見つけて、何なのか気になって全部読んだんだよ。」

冬「火事つてのも、日記に？」

火「ああ。おかしいんだよね……。逃げられない状況下でそんなもの悠長に書く余裕なんてあんのか？」

冬「考えれば考える程謎だな……。火野さん、日記は資料室にあるのか？」

火「こっちの校舎にあるかは分からないが、そうだ。」

冬「あるかは分からない……。だが、他に手掛かりも無い訳だし、仕方ない……。」

冬「資料室へ、その日記を探しに行ってみよう。何か、他にも解るかもしれないしな。」

第20話・偽りの終焉4

冬「資料室へ、その日記を探しに行ってみよう。何か、他にも解るかもしれないしな。」

別館2階 資料室前

冬「あの女は……………来てないな。」

夏「うん、別館に逃げてからは遭遇してないね。」

冬「俺は結構、最初本館の中でうろつき回ってたが見ていないし……………、そっぴや火野さん。」

火「ん、何だ？」

冬「火野さんは俺達に遭遇する前……………、別館にいる時はあいつは

見てないのか？」

火「ああ、見てないな。ここで最初に人を見たのは、お前達だし。」

冬「そうか……………、一応聞くが蒼麻と上山は？」

夏「見てないよ。」

上「俺もだよ。」

冬「先輩は部室出てから遭遇したんだよな？」

秋「うん、そうよ。」

冬「ふむ…………… つう事は本館にいた俺達は運が良かったのか？」

秋「そうなんじゃない？」

冬「そうだ、まだ正体の解ってない、いるかもしれない誰か、コイツには先輩も遭遇してない？」

秋「うん、それは私も分からない。」

冬「もしこつちサイドの人間なら早いとこ合流したいわな……………。」

夏「なあ、あんまり外に居すぎて、もしいきなり来られたりしたらアレだしさ……………」。

冬「あ、ああ、そうだな……………、中に入っちまうか。」

ガララララッ

？「「きげんよ。」

冬「……………」。

ガララ、ピシヤッ

冬「みんな、資料室は後回しにしてよ……………」

ガララララッ、ガシッ

？「見ないフリなんて、酷い子ね、冬木君？」

冬「…何でアンタまでいるんですか？董さん……………」

夏「やっぱり姉さんだったの catt?!!」

夏希董「蒼君までこんな変な所に閉じ込められてたのね……………」

秋「アンタね…、非常ベル鳴らしたの catt……………」

董「おかげで助かったでしょ?」

上「董先輩いなきや、俺達強行突破確定だったしね……………」

火「まあな……………董ちゃんは追いかけられた時大丈夫なのかい?」

董「私はすぐ逃げちゃいましたし、どうにか……………」

冬「……………董さんは、日記見たんですか?」

董「……………日記?」

冬「灰色のボロいノートの……………」

董「ああ……………あれね。」

夏「いつ読んだの?」

董「部室の掃除始める前よ。誰のかな? catt。」

冬「触らなきや、俺達こんなとこに居なかつたんだよな……………」

董「何の話かしら?」

冬「実は……………」。

冬「……………って訳です。」

董「ふうん……………。で、あるかどうか分からない手がかりになりそうな日記を探してる、と。」

冬「まあ、探さないよりマシかな……………」。

董「なら……………」。

ガララララッ

董「早く見つけましょ?」

第21話・偽りの終焉5

董「なら……………早く見つけましょ？」

秋「……………これは、違う、と。」

夏「……………うわ、こんな古い本まであるんだ。次の文化祭の出し物で使えないかな……………」

上「今そんな場合じゃないだろ、って、これエッチい本……………じゃねえでやんの……………」

ガンツ！

上「いてえっ！？」

火「真面目に探せ、馬鹿者。」

冬「……………」。

董「中々見つからないわね……………。冬木君は見つけたかしら？」

冬「いえ、こつちも見つかないです……………」。

上「……………」。

夏「上山、さつさと探せ……………って、どうした？そんな宗治なんか見つめて。」

上「いや……………、冬木って董先輩にだけはなんで敬語なんだろうって……………」。

火「それは俺もちよい気になるわな。俺にもタメ口だし……………」

夏「ああ、それは……………」。

上「まさか、冬木って董先輩の事が……………」

スカーンッ！

上「あだっ?!」

冬「くだらねえ事ほざいてる暇あんなら手え動かせっ、タコ!」

上「すみませんっ!?!」

上「くそ、何で俺だけ……………」

夏「そりゃ、別に宗治は姉さんの事が好きって訳じゃないから。」

火「違うのか？」

夏「姉さんは、小さい時に宗治の事も弟みたいに可愛がってたから、姉みたいに思ってるだけみたいです。」

上「お前らそんな付き合い長いの？」

夏「幼稚園の頃からの付き合いだし、ね。」

火「董ちゃんは昔から冬木の事は『冬木君』って呼んでたのかい？」

夏「昔は普通に名前と呼んでたんですけど、宗治がなんか恥ずかしいからって名字で呼んでくれてって懇願し出したんですよ。」

火「何でまた……………」。

夏「小学校はともかく……………、いくら言っても『宗ちゃん』って呼ばれんのだんだん辛くなったみたいで……………」。

上「ぶくくく……………宗ちゃんって……………」。

ズドンッ！！

上「広辞苑?!?!」

冬「……………」。

上「ひ、ひいいいつ!?!?」

董「危ないから駄目よ、冬木君。」

冬「……………了解。」

夏「……………今の呼び方になる過程で、なんか敬語になってて。」

火「……………そうか。」

夏「どういう訳か、別に姉さんも納得しちゃって、何か言う事も無いんですよ。」

火「冬木も人の子だな……………」。

第22話・偽りの終焉6

火「冬木も人の子だな……。」

冬「……………」。

冬（自分の酷さなんてのは自覚してると言えども……………、あのオッサンはなんて言い方しやがる。）

董「どうしたの、冬木君？」

冬「いや、何でもないです……………」。

董「あら、凄いかめっ面して、そんな事言うのかしら？」

冬「うぐ……………」。

董「それにしても、火野先生にも困った物ね……………」。

冬「……………まあ、仕方ないとは思ってますけどね。資料整理で片付けてたんすから、どこにその日記があるか忘れたってのは……………」。

冬「突っ込まれたくないところには触れないってのが本当に董さんらしいわな……………」

董「そうね……。仕方ないのかしらね……………」

冬「董さんは、やっぱりこの状況は嫌ですか？」

董「当たり前じゃない。逃げられる時に出られるならともかく、閉じ込められるのはごめんよ。」

冬「なら、ちゃっちゃと探してしまえますか。何時までもこんなところにはいたくないですし……………」

董「ええ、だからしっかりと探しましょ？」

冬「言われなくてもっ……………」

冬「董さんのやり取りから、俺達は黙々と目的の物の搜索にかかった。」

冬「そして、少ししてからある異変に気づく事になったのだった……………」

冬「……………これも違う、か……………」

冬（似た様な品は出てくるが、やっぱり簡単には出てくる訳ないか……………」

冬（そもそも、あるかどうかも分かんないしな……………」

火「冬木、蓮ちゃんを知らないか。」

冬「は？蓮先輩ならそっちの棚で探してんじゃ……………」

夏「いないんだよ。」

董「火野先生、他の場所にはいないの？」

火「他の棚を調べてるかと思ってちょっと見回してみたが、そうでもないらしい。」

冬「……………トイレか？」

上「でも、俺達誰も資料室のドア開ける音聞いてないぜ。」

夏「それ以前に、外危ないのに出るとは思えないし……。」

冬「そうだよな……。無いと思うが、どっか隠れてるか見てみるか……。」

火「いくら蓮ちゃんもイタズラ好きだからってそれは……。」

冬「本当にやってたらひっぱたきもんだな。」

董「じゃあ、捜しましよ。いなければ、そっちの方が問題よ。」

冬「ロッカーん中も、机の下もダンボールの中も本棚の影にもいない……。隠られる場所はもう無いから、こうなるともう外か……。」

夏「でも何で……………」?

冬「俺が聞きたいわ……………」。

火「仕方ない、携帯で連絡してみるか。流石に状況がな……………」。

上「もし隠れてたりしてる時とかだったらまずいけど……………」

ピッ

火「……………」。

冬「無事でいてくれよ……………」。

火「……………」?

ピッ、ピッ

火「……………」

冬「……………」火野さん?

火「……………」

堇「火野先生つ。」

火「……………」

火「おかしい……………」。

夏「？」

火「蓮ちゃんの携帯に繋がらない……………」。

第23話・偽りの終焉7

火「蓮ちゃんの携帯に繋がらない……………」。

夏「なっ!?!」

冬「……………」。

上「嘘だろ……………」。

董「先生、携帯を……………」。

火「……………」。

董「……………」。

董「呼び出し音すら鳴らないわ……………」。

上「どづいづ……………」

冬「先輩、いきなり消えたのかもな……………」。

夏「いきなりって?」

冬「だから、何の前触れもなく、本人も解らない内に、だ。」

上「どうやってだよ、そんないきなりだなんて……………」。

冬「分からない。ただ……………」

冬「俺達の内誰か、ここの扉開ける音なんて聞いたか?少なくとも、俺は一つも聴いてない。」

夏「確かに……………、聴いてない。」

上「俺も、確かに……………」

董「私もよ。」

冬「火野さん、あんたは？」

火「確かに、聴いてないな。」

冬「となると、その考えで良いかもな。」

上「でもよ、一体何処にいったんだよ……………」。

冬「それも分からない。ただ、少なくともうっつは思いつく。その前に……………」

ピッ、ピッ

夏希董

ピッ

ピリリリリリリッ

董「きやつ」

ピッ

冬「やっぱりうっつだな、思い浮かぶなら……………」。

董「冬木君、何なの？」

冬「……………失礼。気になったもんすから……………、まず可能性一つ目。」

冬「元の居るべき場所に戻ってしまった。」

夏「戻った、先輩だけ？」

冬「ああ、蒼麻は俺達がここに最初来てから取った行動は覚えてるな。」

夏「……ああ、誰に連絡が着くか、って……。」

冬「そう、俺達はそれでこの校舎内にいる人間と、そうでない奴らの特定が出来た。」

夏「それで先輩が元の世界に戻ったって……？」

冬「あくまで可能性だがな。できれば、そうであってほしいっちゃほしいが……さて、2つ目。あの女に捕まってしまったか……。」

上「……………」

冬「ただ、先輩が自分で出た、もしくは、あいつがここに入ってきた形跡が無いとなると、その可能性は0に近い。」

火「どうしてそう思う？」

冬「前者の場合、仮に先輩が出てったとしたなら、誰も先輩が出てったのに気づかないなんてのは、いくら何でも無いだろう。後者にしたって、それなら先輩一人だけ狙うなんて必要がない。」

火「まあ、そりゃそうだな……………」

冬「さて、最後の可能性……。一番考えたくない可能性だ。」

冬「先輩が消滅したという可能性。」

第24話・偽りの終焉8

冬「先輩が消滅したという可能性。」

上「おい、冬木!？」

火「落ち着け、可能性の話だ。」

冬「一番当たってほしくない可能性だがな……………」。

火「だが、いきなり居なくなってしまったっての考えると……………」。

董「否定も出来ないわ……………」。

上「っ……………」。

冬「仮に先輩が本当に消滅したとする。」

冬「なら、次に危険なのは俺達だ。」

上「……………え?」

夏「蓮先輩はいきなりいなくなった。たぶん、自分でも何が起きたか分からず……」

夏「俺達も、このままいくと、自分でも分からないまま消えていく……そうだろ？」

冬「ああ。そして、いきなり消えた原因の分からない俺達は、為す術なく消えていくしかない。」

上「そんな……!？」

冬「もし仮にそうだった場合、何とかしたくても、どうしようもないんだ。とにかく、今出来るのは、あの女に対してと、自分達が消えるかもしれない原因に常に気を配ること……」

夏「日記だろ？」

冬「ああ。」

董「それにしても、見つからないわね…、火野先生、本当にこの部屋に？」

火「ああ、間違いない。俺はこの部屋で読んだからな。だが、出てこないとなると……。」

董「ここには無い、という事になるのかしら……。」

火「もし無いとなると……どうした物か。」

冬「……まだ探してない箇所だってある。とにかく探すしかないだろ。」

火「……そうだな、よし。冬木はそのまま、この辺りを董ちゃんとさがせ。」

火「俺はここから先をやっちまうから、夏希と上山……は？」

冬「上山なら、俺の後ろに……」

夏「……いない。」

董「冗談にならないわね……。」

全「……。」

冬（上山の事だから、悪ふざけでもしているのだろつ。そう思っ
ていや……そう願って探してみたが、結局見つかる事はなかった。）

火「上山の性格上、危険だってわかりきってる外に出るとは、思えない。」

夏「……………そうですね。そういう意味じゃ、あいつはある意味この中で安全な奴ですから。」

董「まるでフォローになってないけど、そうね。そういう事に関しては、馬鹿な子じゃないはずよ。」

夏「先生、危険なのは分かってますけど、やっぱり外に出て二人を探しに行く方が……………」

火「……………そうだな。危険なのは確かだが、もう……………様子見も出来る状態じゃない。」

董「なら、さっそくみんな……………」

冬「駄目だ。」

夏「駄目だって……………何で!？」

董「冬木君、もうそんな状態じゃ……………」

冬「確かに……………あいつらはいきなり消えた。俺達の探してる物に触れて、消えた可能性もある。」

火「そうかもしれんが、仮にもしあいつらがまだこの中にいて、あ

の女の子に見つかって逃げ回ったりしてたら……………」

冬「だからだ。この人数で動いたら、今度こそ捕まったっておかしくない。」

夏「そんなの、うまく分散して……………」

冬「奴がどこにいるかも分からないのか？」

夏「……………」

冬「揃って動く必要なんてない。蒼麻、お前達は引き続きここで日記を探せ。」

董「冬木君、あなたまさか……………」

冬「……………」

冬「俺は一人で、アイツらを探す。」

第25話・偽りの終焉9

冬「俺は一人で、アイツらを探す。」

火「……………冬木、悪いがそれは……………」

冬「許可できないと言いつつもりだろうが、もうここまで来たんだ。許可なんて無くても行くよ。」

夏「宗治、1人じゃ危険だよ。やっぱりみんなで……………」

冬「お前らがここで日記を探すのも、同じくらい危険かもしれないんだ。どっちも危険の度合いは変わらねえよ。」

董「……………どうしても行くのね。」

冬「……………いついつの、俺向きでしょ?」

董「馬鹿な子……………」

冬「馬鹿っすよ。探し物なんて少しでも頭使うような事するくらいなら、俺はこつこつ、体力使って走り回る仕事のが性に合う……………。だから、任せましたよ。」

董「無事に帰って来るのよ。」

冬「先輩達こそ。こまめに連絡すんで、揃って消えないでくださいよ。」

ガララララッ……

夏「姉さん、何でっ!？」

董「冬木君のあの顔の時は、何言っても無駄よ。もう十年以上も一緒なんだから、分かるでしょ?」

夏「そうだけど……っ」

火「董ちゃん、だったら尚更今この時だけは止めるべきだったんじゃないか?分からない訳じゃないでしょ、あいつはほっといたら董ちゃんよりも無茶苦茶な事やる奴だぞ。」

董「そうね。きっとまた、馬鹿みたいに無茶するでしょうね。」

夏「分かっているなら止めるよ!?!下手したらあいつ……」

董「駄目よ。私達は任されたでしょ?早く日記を探しましょ。」

夏「姉さんっ!!」

董「……………大丈夫よ、絶対に。」

夏「何を……………」

火「待て、少し落ち着け。夏希。」

火「……………董ちゃん、何を根拠にそう言えるんだ。」

董「言わないから。」

火「……………?」

董「あの子は、出来ない事は言わないから。」

火「……………。」

董「あの子も、確かに馬鹿よ。蓮ちゃんよりもふざけた無茶をすぐにやらかすし、その過程で自分がボロボロになったりなんて事もいっつもだし。」

董「でも……………。」

夏「……………。」

董「いつも出来る事しか言っていないわ。」

董「だから探しましょう、日記を。私は、あの子の期待に嘘で答え
たくなんで、ないから。」

第26話・偽りの終焉10

異質な静寂の中、俺は一つ息をつく。

冬「……………さて。」

目的は一つ

冬「2人を探すとするか。」

二人を見つげ、あいつらと合流して、またそこから何とか脱出する手段を考える。
ないかもしれない。だが、諦めて探さないでいるよりは遙かにマシだ。

冬「ひとまずは、別館から探すか……………」。

まずは三階から一階に降りていく形で探す。

一階を最後に回すのは、部室のある一階を後回しにしたいというのが理由だ。

冬「さあ、行くか。」

覚悟を決め、階段で上へ上がる。

二階は既に探してある。三階にいないのであれば、次は一階に探しに行けばいい。

冬「見つかってくれよ……。」

20分程したろうか。

冬「まあ、簡単に見つかるとは思わなかったが……。」

案の定、と言いたくないが、やはり二人は見つからなかった。別館はそんなに広くない。

全部の部屋を渡り歩く事しても10分もかからない、そんな中でこつも一つの階にここまで時間を割いたのにいないのでは、間違いなくいないのだろう。

後ではいき倒されるのを覚悟で、入りたくもない女子トイレにも入ったのだ。

普通に考えれば、間違いなく俺は殺されるであろう場所を探している。

これを一階（それも女子更衣室込み）でもやらなければいけないのだと考えるとそれだけでも頭の痛い話だ。

冬「蓮先輩がそこにいないのを祈るか。そこに上山がいるならボコボコにすればいいだけだが……………」。

そうばやきながら、携帯を取り出し、蒼麻に連絡を取る。

夏『もしもし。』

冬「俺だ。二階にも三階にもいない。そっちは？」

夏『……………こっちも収穫0だよ、ごめん、一番大変な役割1人でやらせてんのに……………』

冬「いいつての。俺なんかより物探し得意なお前らがそこやってくれるだけで大助かりだ。そっちは任せた。俺は一階を探して、いらないなら本館を探す。」

夏『わかった、こっちは任せてくれ。』

冬「ああ、じゃあな。」

そう言つて、電話を切る。

向こうが探してくれてる分、手ぶらだけは避けたいものだ。

冬「さあ、ちやっちやと行くか。」

そう、こんな所からは1秒でも早く出たいのだ。

さっさと2人を拾って帰ろう。

帰れる事をただ信じて……

第27話・偽りの終焉11

ボタン、と一番最後に搜索を後回しにした部室の扉を閉める。

冬「……………」

別館を隅々まで探した結果、二人はいなかった。

それは、心の何処かで分かっていた事とは言え、そうあっては欲しくないという物だった。

本館の方がまだ残っているとは言え、可能性はないかもしれない。

冬「そう言えば……………」

危険を承知で、慎重に動いていたが、あの女に遭遇していない。

警戒を緩めてしまおうか

そう思いたくなくなってしまふほど、彼女は出て来ていない。

まさか……
冬

俺は少し、嫌な事を考えてしまふ。

例えば、今二人は本館にいる。

そこにはあの女も……………。

二人とも追い詰められているのか、或いは、もう既に捕まっている

か……。

そうなっていないかもしれない。

だが、そうと言いつ切る事も出来ない。

携帯を取る。

蒼麻に連絡を入れ、現状を説明、そこからすぐに本館の方に移動して二人を探す。

頭の中でこの後の行動の段取りを組みながら、携帯を操作し耳にあてた。

しかし………

冬「……………嘘だろ。」

携帯からは静寂が返ってきた。

もう一度かけ直す。

何も返ってこない。

冬「っ。」

信じたくない現実に耐えきれず、火野さんに連絡する。

冬「董さんっ!?!」

冬「洒落になってねえじゃねえか……………」。

希望と願いは、一つの現実と大きな絶望と恐怖になって帰ってきた。

冬「俺1人しかいないのかよ……………」。

もう、二人を探すどころじゃなかった。

今頃になって、抑え込んでいた恐怖が身を包んだ。
誰かがいたからこそ目を向けずにいられた。

だから………

ただ、ひたすら意味があるかも解らずに、ひたすら俺は走った。
向かう先に、何が待ち受けているかも解らず、ただ、ひたすらに………

第28話・偽りの終焉12

パンツ!!

力任せに資料室の扉を開けた。

当たって欲しくもない予想は現実となっていた。

冬「……………いない。」

誰もいない。

蒼麻も董さんも火野さんも、3人がここで日記を探していた形跡だけが残っているだけだ。

カツカツカ……………

冬「……………。」

何処かで何か音が聞こえる気がするが、余りにも受け入れたくない現実に頭が働かない。

カツカツカ……………

後悔が頭の中で爆発的に湧き上がる。

捕まるかもしれない、というのも前提で皆で動くべきだったのだ、と。

カッカッカ……

音が近づいている。

正体なんて解っているが、逃げる気にも、隠れる気にもなれない。それほどシヨックがでかすぎた。

だが、逃げないのとはそれだけではない。

カッ………

足音は既に背後にいた。

冬「……………」

扉が開く音など聞こえたか？

などと余計な事を考え、恐怖を和らげ振り向く。

女「……………」

冬「っ。」

女「……………何を驚いているの？」

冬「いや……………」

驚くなどというのは無理な話だった。

目の前にいるのは確かに、俺達が見たあの恐ろしい少女と同一人物だ。

冬「君は、本当に蓮先輩を追いかけていた奴なのか？」

自分でも妙な事を聞いている自覚はあったが、そう聞くしか出来なかった。

禍々しく赤い眼などではなく、澄んだ黒い眼をしているのだ。追ってきた奴には違いないが、これでは別人だ。

女「……………そうよ。」

冬「なら、皆を消したのも、君が…。」

言い切る前に、目の前の女は首を横に振る。

女「……………あの人は、違うから。」

冬「違う？そいつは……………」

その先を言おうとして、突然自分の身体に異変を感じ始めた。

冬（何だ、この内側から消えていきそんな感覚は……………。）

女「……………あなたも、違う。」

彼女は背を向け歩き、少し離れた所で振り向き言った。

女「……………だから、あなた達は帰る。」

冬「待って……………くれ。それは、元いた場所に帰れるってのか!？」

女「……………。」

視界もぼやけてきているが、彼女は確かに頷いた。考えようとする思考も消えていく中、彼女は言う。

女「……………私はもう、長くない。あなた達はもう来れないだろうけど、また、誰が来るかわからない。だから、私を……………」

指先からゆつくり消えてく様な感覚を感じている中で、彼女は俺に願いを託した。

女「……………灰にして……………」

あの時見た狂気もまるで感じられない。

最終話・偽りの終焉

冬「……………ん。」

目覚めてみれば、そこは自宅の机の上だった。どうやら、いつの間にか寝ていたらしい。ふと、頭の中に、ある少女の顔が浮かぶ。

冬「……………そうだった。」

眠気は一気に消え失せ、あの異様な出来事が全て蘇る。時間を確認する。

3時31分53秒

多少進んではいるが、学校内で確認した時間と大差変わらない。嘘では無いらしい。蒼麻に連絡を入れようと、携帯に手を伸ばしかけ、止める。

冬（あいつの時間は俺より遅かった筈だ。となると……………）

と、考え始めたところで携帯に着信が入る。ディスプレイを見ると、ちょうど今、頭の中に思い浮かんだ人物だ

った。

火『もしもし、冬木？』

少し落ち着きない様子の、火野さんの声が聞こえてくる。

冬『ああ、無事だったみたいだな。』

火『……そつちも無事そうぞ何よりだ。』

俺の声を聞いて安堵するため息を吐く火野さん。

冬『火野さん、上山は？』

火『部室にいるよ、ピンピンしてる。』

冬『そうになると、後は蒼麻と先輩、董さんか……。』

火『いや、蓮ちゃんもいる。蒼麻と董ちゃんだけだ。』

時間の確認なんてしなかったから解らなかったが、どうやら、蓮先輩は俺達より早かったらしい。

冬『先輩も無事か……。』。分かった、準備して部室に行く。』

火『そうしてくれ。』

冬「ああ、すぐに行く。それと……………」。

火『……………？』

冬「日記の用意を頼む。」

火野さんとの連絡を終え、支度して部屋に着く頃には4時を回っていた。

上「冬木、無事で良かったよ！」

冬「流石に、今回ばかりは、お前もな、と言っとくわ。」

見たところ、無事な上山を見て安心する。

秋「……………」。

冬「先輩、どつかいてえ所は？」

秋「え？う、うん……。私は平気……。」

少し疲れ気味らしいが、蓮先輩も無事だ。

一番最初にいなくなったもんだから、無事を確認出来たのは嬉しい限りだ。

火「お前、あの後大丈夫だったのか？」

冬「ああ、あの女にも会ったが、何も無かった。」

火「……………っ。」

冬「詳しい話は、後の2人が来てからだ。頼んでおいたのは？」

火「……………そこにある。」

火野さんが指差した場所には、あの不思議な学校内で探し回っていた一冊の日記が置かれていた。

冬「……………。」

何に躊躇う事もなく、日記を手に取り、パラパラとめくっていき、最後のページを見る。

女「……………ばき君、ち……………ら……………」

かすれて読めなくなってしまった最後の日記。
彼女は、何を想い、これを書いたのだろう。
背後で扉の開く音がする。

夏「宗治、良かった……！」

冬「お前もな……。」

親友の無事を見て安堵し……

董「宗君、良かった……。」

冬「董さん、呼び方……。」

姉みたいな人に照れ隠しをする。

これだけあれば、何時もは満足出来る筈なのに……

何故、俺は……

もう、会うであろう事ない少女の事ばかりが頭の中にあるのである。
う……。

女「……あなたも、違う。」

全てが閉ざされた校舎にただ1人、誰かを待つ、あの少女の事ばかり……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348x/>

閉ざされた校舎(ほぼ台詞のみ)

2011年12月11日17時51分発行